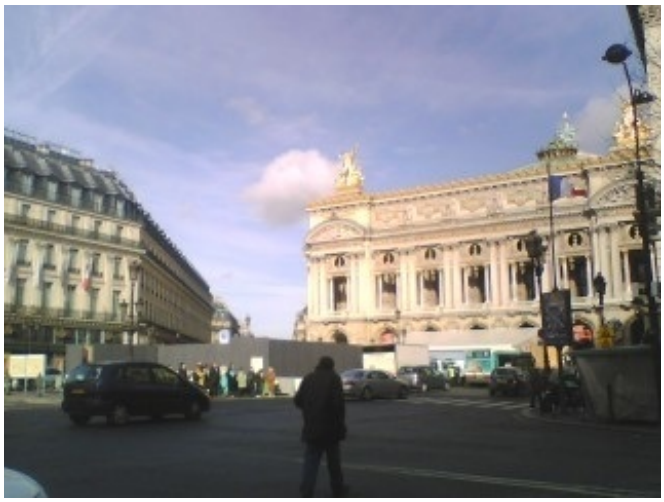
3月2日

旅行記の続きです。
この旅行記のバックナンバーがありますので併せてお楽しみください。
夜の底の旅その1
その2
その3
その4

ローマから寝台列車アルテイシアに乗り込む。一番安い6人クシェット。私の他には子供連れの夫婦。車掌さんが切符とパスポートを預かっていった。明日パリについたら返してもらえるそう。国境を越えて夜汽車はゆくのだな。車掌が水を配ってくれた。さて列車の旅を楽しみます。



パリにつく。イタリアより空気が少し翳っている。こんなに天気がよいのに。

寝台列車の食堂車での朝食は素敵だった。フランスの田舎を眺めながらゆっくりとコーヒーを。

今はホテルのチェックインまで、いかにもおフランスな赤い壁のカフェでカフェ・クレームを。要するにカプチーノなんだけども。

フランスにきたら生牡蠣が食べたかった。好物なのです。

ホテルの近くに生牡蠣がずらりと並ぶ店をみつけて、半分無意識にふらふらと入る。生牡蠣半ダースに白ワイン。あまりにおいしくて恍惚となる。

パリの人間もなかなか陽気で親切なことがわかりほっとする。なんとなくイタリアにくらべて冷たいイメージがあったので。

3月3日

サガンが処女作を発表したのは18歳。

金井美恵子も「愛の生活」をその歳くらいで書いたはずだ。

早熟という言葉があるが、こんな街に住んでいたら書けるのかもしれない。もちろん私には無理なんだろうけれど。私は18歳を過ぎてしまったし、パリには住んでいなかった。

お食事に行ってきます。

規則だらけのローマのユースホステルから普通のホテルに移動したので快適。ユースでは門限があったり、シャワーの使用時間が決まっていたり。

もっともこの快適なホテルは2泊で、そのあと再びドミトリー生活。長旅だと全てよいホテルに泊まるにはお金がかかりすぎるのでメリハリを。

写真はホテルの近くのパッサージュ。アーケード街のパリ版。とてもかわいらしい古着屋さんやアンティークショップがひしめいていて眺めているだけで楽しい。アンティークの家具などには驚くほど安いものもあるが日本に運ぶことを考えると躊躇してしまう。船便は如何程かかるのだろうか。

昨夜の寝台車ではぐっすり眠れたのに、また不眠。外は春の雨。

昨夜はフル・コースを食べた。ご馳走になったのだけれど。前菜をサーモンにして、メインも魚、さらにまた生牡蠣というシーフードなコースを食べた。楽しい食事だった。きらびやかな店ではピアノの生演奏。サービスもよく、満足。

私はまだ牡蠣にあたったことがないが、いつかあたるかしら？相当辛いと聞くけれども、あたると聞いても食べてしまう。こんなに牡蠣を愛しているから神様どうか牡蠣であてないで！

帰国は今月13日です。旅も終盤。

天気が悪いせいもあるのか、やはり格段にイタリアより寒い。

パリらしい場所にいこうと決めた今朝はシャンゼリゼ通りへ。一度目にきたときはイルミネーションの時期で、きれいだったが、朝のシャンゼリゼもすがすがしい。

地下鉄駅の通路にヴァイオリンを弾くパプォーマーがいて、あまりにも素晴らしい音色で2曲聴きいる。たった1ユーロの最高のコンサート。まだ耳のうずまきに音が残っている。

で、私は今、シャンゼリゼのカフェでダージリンを飲んでいる。

陽が射しては翳る、めまぐるしい外。

昨日二週間ぶりに日本の新聞を読む。日本語がしみるようにひりひり入ってきた。そろそろ本が読みたい。帰国したらしばらく本ばかり読みそうだ。

パッサージュの中のオープンカフェでグラスワインを注文したところ。

古書店巡りが楽しい。かさかさに乾いた紙たちが、ほとんど永遠の時間の眠りについているかのような静けさで、しかし確かに私に語りかけてくる。

日本を描いた古い絵がたくさん売られていたのでじっくりと眺めた。芸者の女性などは本当に美しく描かれている。他のアジア諸国の女性が描かれている絵と比べて抜きんでている。フランス人は日本をなんと美しい国と認めてくれたことか。

3月4日

シテ島をうろうろ。セーヌに架る橋でひとやすみ。ジャズを聴きながら(写真)。

本当のことが知りたかったような気がする。でも今はただ景色を眺めていれば満足。それが本当のことかは判らない。自分で頭が痛くなるほど考えるのだ。本当のことは。これから先ずっと。

旅の最終目的地につき、やっと荷物が増やせる。買い物魂に火がつく。この靴、ヒールが嫌いな私にぴったり！いくらしたかは聞かないで下さい。。カード請求怖い。でもまだ買うのです。また働いて稼ぐもんねー。

次の宿に移動。電話をして迎えにきていただくシステムなのだが、電話に誰もでない。約束の時間より早いので仕方ないかとカフェへ。今日は日曜日でフランスはたいていのお店は休み。やっとみつけたカフェは、地元のおじさんがたむろする庶民的な店。店員さんも愛想がよいし、店にぎゅうぎゅうにつどっている人達も和やかに休日を過ごすムードで落ち着く。今まで少し背伸びをして高級なカフェに入ってきたが、もともと自分にはふさわしくなかったかもしれない。

店内を観察すると、庶民的なおじさんたちは昼からお酒を飲んでいる。ビールでもないウイスキーでもない、少し明るい朱の入った茶色のお酒を小さなワイングラスできゅっとやっている。そして皆さんよくしゃべる。もっともイタリア人の陽気さのトーンはなくて、フランス語の静けさに満ちた明るさ。

店内には子供もいて盛大にスプレーのおもちゃを吹き出したりしている。飛び交うパステルカラーの泡の紐たち。

この街は東洋人や黒人も多い。移民の街なのだろうか。昨日まで泊まっていたホテルは観光地の中だったので、日本人観光客と白人の街だった。

ああ、私も昼から呑みたくなってきた。

無事宿に入る。

今日は第一日曜日で美術館が無料と教えていただき、ただいまルーブルの前。すごい行列。大好きなダ・ヴィンチの「天国への道しるべ」をじっくり眺めてくるつもり。